

御威光と金

—静岡県富士山世界遺産センター・徳川記念財団共同調査研究ノート—

<静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 松島 仁>

静岡県富士山世界遺産センター所蔵の狩野董川中信筆「富士飛鶴図」(挿図)は、幕末期の外交史料集『続通信全覧』(外務省外交資料館蔵)との照合の結果、万延元年(1860)遣米使節が持参した14代将軍徳川家茂から米国15代大統領ジェイムズ・ブキャナンへの贈答品であることがこのたび判明した(拙稿「万延元年のディプロマティック・ギフト」『國華』1529号)。

『続通信全覧』中には、ブキャナン大統領へ贈る掛幅10幅の制作過程が詳細に記録されており、そこに記載される作品と「富士飛鶴図」が、作者や画題、様式、法量ばかりではなく、表装の裂地や軸先の素材・文様までが完全に一致したのである。

一方、遣米使節から2年後、文久2年(1862)に英国、フランス、オランダ、プロイセン、ロシア、ポルトガルの6ヶ国に派遣された第一次遣欧使節も各国元首に掛幅を各10幅贈答し、フォンテーヌブロー宮殿に所蔵されるフランス皇帝ナポレオン3世宛ての作品のほか、その所在が次々に発見されている。

これら外交的贈答品としての掛幅群はともに、金の糸を惜しげもなく織り込んだ金襴による裂地や金蒔絵による軸先など破格の豪華さを示す表装を備える。『続通信全覧』によれば、掛幅群の表装は外国奉行からの指示のもと幕府細工所において調進されたことがわかる。

なお旧将軍家のコレクションを保存・管理する徳川記念財団には、遣米・遣欧使節持参品と近い様式の表装をもつ掛幅が存在することが、昨年度末より静岡県富士山世界遺産センターと徳川記念財団が共同で進める同財団所蔵品の悉皆調査の過程で確認された。十三代将軍徳川家定筆「日ノ出遠山烏図」と御台所の天璋院篤姫筆「竹図」である。両幅ともに手すさびによる簡略で軽やかな作品であるが、対照的に画を包む表装部分は重く眩い。両幅を収める箱の蓋には、それぞれ「温恭院様／御筆／日ノ出遠山烏 一幅」、「篤君様御筆 御懸もの 竹の絵」と記される。将軍や御台所による親筆が臣下に下賜され、あるいは他者の目に触れるなど第三者との関わりをもつとき、それらは将軍の身体の一部としてたちまち御威光を放つ。

将軍から海外の元首に遣わされる外交的贈答品と将軍親筆として下賜される書画幅。両者はともに将軍とその身体のアレゴリーとして御威光を発出することが期待され、黄金の輝きに包まれるのである。その意味においては、遣米・遣欧使節が持参した掛幅群も、将軍親筆の書画幅も、神祖東照大権現を祀る日光山が発つ赫奕たる反照と遠からぬ位置にある。

当センター本「富士飛鶴図」の表装については、『続通信全覧』から細工所における製作の詳細をたどることができたが、今後共同研究調査を進めるなかで細工所に関するさらなる史料また作品の発見により、“御威光”創出の過程、その物質性について明らかになることが期待されよう。



狩野董川中信筆 富士飛鶴図
静岡県富士山世界遺産センター蔵